

2025年度 総合型公募制学力入試Ⅱ期(11/23)試験問題

国 語

[60分]

- 注意**
1. 試験開始の合図があるまでこの冊子は開いてはいけません。
 2. この冊子は19ページあります。ページの脱落や解答用紙の汚れがあった場合には、監督者に申し出てください。
 3. 問題冊子には受付番号を記入してください。
 4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。
 5. 問題冊子は持ち帰ってもかまいません。

マーク式解答用紙の記入上の注意

1. 解答用紙はすべてHBの**黒鉛筆**で記入してください。

2. マークの記入方法

「正しい例」



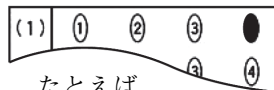
「悪い例」

うまい ●

ほそい ①

短い ①

はみだし ●



たとえば
解答欄(1)に4と
解答する場合、
正確にマークして
ください。

3. 訂正するときは消しゴムでていねいに消し、消しくずを
残さないでください。

右図のように×印をつけても消したことはありません。
また指定欄以外には何も記入しないでください。



- ◎ 解答用紙には受付番号と氏名を記入してください。
受付番号は左端から記入し、受付番号欄のマーク欄にも必ず
マークしてください。

- ◎ 受付番号を正しくマークしていない場合、採点できないこと
があります。

受 付 番 号

受 付 番 号

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

からだの意識というのは、ささいなことでもかんとんにもつれてしまう。ほんとになさけないくらいあつけなく、からだの意識は揺らいでしまう。そういう壊れやすさ、揺らぎやすさというのは、いったい何に起因するのだろうか。

① 身体が〈イメージ像〉だからだ、イメージと言えびつくりするかな。ひとはたしかに、身体がなければ生きていけないし、現に手でさわるとたしかに歴然と物としてあるし、これがたんなる〈イメージ像〉であるはずはない。だれもがそう反論したって不思議じゃない。でもほんとうにそうなのだろうか。

じぶんの身体というものは、だれもがじぶんのもっとも近くにあるものだとおもっている。たとえば包丁で切った傷の痛みはぼくだけが感じるもので、他人は頭で理解してくれても、ぼくの代わりに痛んでくれるわけではない。その意味で、ぼくとはほかならぬこのぼくの身体のことだ、と言いうるほどに、ぼくはまちがいなくぼくの身体に密着している。ところが、よく考えてみると、ぼくがじぶんの身体についてもっている情報は、ふつう想像しているよりもはるかに**ピン弱**^aなものだ。身体的全表面のうちでじぶんで見える部分というのは、ごく限られている。だれもじぶんの身体の内部はもちろん、背中や後頭部でさえじかに見たことがない。ましてや自分の顔は、**シユウ生**^b見ることができない。ところがその顔に、じぶんではコントロール不可能なじぶんの感情の揺

れが口出^cしてしまふ。なんとも無防備なのだ。

ぼくらの身体というのは、知覚情報も乏しいし、思うがままに統^dギョもできないという意味では、ぼくらにとって想像以上に遠く隔たったものだ。

ぼくの身体でぼくがじかに見たり触れたりして確認できるのは、つねにその断片でしかないとする、このぼくの身体って離れて見ればこんなふうに見えるんだろうな……という想像のなかでしか、ぼくの身体はその全体像をあらわさないとやっていいはずだ。つまり、ぼくの身体とはぼくが想像するもの、つまり^{イメージ}〈像〉で

かありえないことになる。言いかえると、見るにしろ、触れるにしろ、ぼくらはじぶんの身体に関してはつねに ア な経験しか可能ではないので、そういうばらばらの身体知覚は、ある一つの想像的な「身体像」を繋ぎ目としてたがいにパッチワークのようにつながることではじめて、あるまとまった身体として了解されるのだということだ。ぼくらが着る最初の服は、この意味で、〈像〉としてのからだの全体像なのだ。そして、身体はその意味で想像の産物、解釈の産物でしかないからこそ、もろいもの、壊れやすいものなのだ。

だから、他人に怪訝^{けげん}そうな表情で全身嘗^なめるように見回されるだけで、じぶんの抱いている身体像はとたんに揺らいでしまふ。あるいは、異性の服装をするよう強制されるだけで、たちまちそういう自己解釈によって成り立っているじぶんの イ は危うくなる。

そこでひとは、こうした^{イメージ}〈像〉としての身体のもろさを補強するために、いろいろな手段を編みだすことにな

る。つまり、(わたし) というものの存在の輪郭を補強することで、じぶんのもろい存在がかもす不安をしずめようとす。そのために、たとえば皮膚感覚を活性化することで、見えない身体の輪郭を浮き彫りにしようとする。熱い湯に浸かったり、冷水のシャワーを浴びたり、日光浴したり、スポーツで汗をかいたりする。あるいは、人と身体を接触させたりする、あぐらを組む父親のふところに入る、異性と身体をふれあう……。

なぜこういう行為が心地よいかというと、たとえばお風呂に入ったりシャワーを浴びたりすると、湯や水と皮膚との温度差によつて皮膚が刺激され、皮膚感覚が覚醒させられる。ふだん見えない背中や太股の裏の存在が、その表面のところできつきり浮かび上がってくる。

ウ

には直接感覚することのできない身体の輪郭が、

皮膚感覚というかたちできつきりしてくるのだ。お父さんの膝のあいだに座つてもたれたときに背中で感じる温かい壁のような感触にひたつて安心するということのも、
エ 以外にこういう理由もあるのだろう。激しい運動をして筋肉がこつたり、汗をかいて肌がひんやりするのも、他人の手で身体をなでられるのも、お酒を呑むと血が皮膚の裏側ぎりぎりのところにまで押し寄せてくるような感覚があるのも、みな、身体のおぼろげなイメージ、たよりないイメージを補強する効果をもっているのだろう。それらがひとの存在に確かな囲いを与えてくれるのだ。

② 服についても同じことが言える。服を着ると、身体を動かすたびに皮膚が布地に擦すれる。身体の動きとともに、身体表面のそこかしこで身体と衣料との接触が起こるのだ。その接触感が、ふだんはじかには見えない身体のあ

やふやな輪郭を、くつきりと浮き立たせてくれるのだ。こういう感覚が、存在のベーシック・トーンとでもいうべきものとなって、ぼくらの気分をあるていど安定させているのだろう。

ところで、〈わたし〉の輪郭を補強するには、皮膚感覚を使うこのようなフィジカルな方法のほかに、もう一つ別の方法がある。これまで、ぼくらの身体というものはイメージとしてしかとらえられないもの、つまり想像や解釈の対象でしかありえないということのみてきたのだけれど、そういうイメージとしてのじぶんの存在を、社会的^③な〈意味〉で何重にも包装し、強化していく方法だ。身体の表面にさまざまな意味を発生させ、増シヨクさせる^eことで、じぶんがだれかという、そういう意味づけをもっと細かく、そしてもっと多様なしかたで与えていくということ、要するに、じぶんの性別、あるいは性格、職業、ライフスタイルなどを、眼に見えるかたちで表現していくというやりかただ。

イメージとしての身体に切れ目を入れる。それが身体の表面にさまざまの意味を発生させるもつとも基本的な手法だ。たとえば一枚の布をまとうとしよう。布の両端を紐ひもかボタンでとめると布は筒になる。するとそこに〈内〉と〈外〉が出現することになる。そしてその内部が、ぼくだけの「秘密の」空間となる。つまり、見せる／隠すという二つのベクトルが、布をまとうという一つの行為のなかに発生しはじめるのだ。すると、ひとの視線は布とそこからのぞく肌との境界に吸い寄せられる。境目をどこに設定するか、というのが服飾のポイントになってくるわけだ。胸ぐり（ファッショ用語では「デコルテ」という）をどのていどの深さにするか？ スカートの

裾はどの位置にするか、くるぶしを出すか、膝も出すか、太股を口出するか？ 袖口の位置は？ 髪の毛の長さ
は？ ソックスの上端はどのあたりに？ そうしてたった一センチの出入りにころをときめかせるのだ。黒い
ガーターとストッキングと素肌とのコンビネーションでできているあの「誘惑」の装置など、ただ身体を象徴的
に切断するために考えだされたと言えないくらいだ。

切れ目は肌にも書き込まれる。口紅で唇をその周辺から切り取る。目のまわりをアイラインで縁どる。揉み上
げや髭ひげのデザイン、マニキュア、ネックレスやブレスレットなどにも、身体を象徴的に切断するという面がある。
身体の表面に線を引き、それを塗り分け、いくつかに分割することで、そこに意味を呼び込むのだ。身体の表面
に引かれた切断線、それはシャープであればあるほど、あやしげな オ をもつ。

（鷺田清一『ちぐはぐな身体』より）

問一 二重傍線部 a ㄥ e のカタカナを漢字に直した時、それと同じ漢字を使うものを、次の各群の 1 ㄥ 4（傍線
部）からそれぞれ一つ選べ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| a | 1 | ヒン格 | 2 | ヒン度 | 3 | ヒン困 | 4 | 来ヒン |
| b | 1 | シユウ拾 | 2 | 民シユウ | 3 | シユウ点 | 4 | シユウ遊 |

c	1	経口	2	発口	3	廃口	4	賄口
d	1	ギヨ意	2	ギヨ夫	3	ギヨ類	4	ギヨ港
e	1	修シヨク	2	誤シヨク	3	抵シヨク	4	シヨク産

- aは解答欄(1)にマークすること
- bは解答欄(2)にマークすること
- cは解答欄(3)にマークすること
- dは解答欄(4)にマークすること
- eは解答欄(5)にマークすること

問二 空欄ア～オに入る語句として最も適当なものを、次の各群の1～4からそれぞれ一つ選べ。

ア	1	部分的	2	一時的	3	感覚的	4	間接的
イ	1	社会性	2	同一性	3	独自性	4	全体性
ウ	1	表面的	2	視覚的	3	触覚的	4	実際の
エ	1	感覚的	2	本質的	3	身体的	4	心理的

問四 傍線部②「服についても同じことが言える」とはどういうことか。最も適当だと考えられるものを、次の

1～4から一つ選べ。

- 1 他人と身体を接触させたりするのと同じように、安心するということ
- 2 服を着ることのでひとの視線を感じ、身体が切断されるということ
- 3 熱い湯に浸かったり、冷水のシャワーを浴びたりするのと同じように、身体の輪郭が皮膚感覚で了解されるということ
- 4 一枚の布をまとおう行為と同じように、布と肌との境界が生じること

解答欄(12)にマークすること

問五 傍線部③「社会的な(意味)で何重にも包装し、強化していく方法」とあるが、その例として適当でない、と

考えられるものを、次の1～4から一つ選べ。

- 1 口紅を塗る
- 2 髪で顔を覆う
- 3 イヤリングを装着する
- 4 お酒を飲む

解答欄(13)にマークすること

問六 傍線部④「意味を呼び込む」とはどういうことか。適当でないと考えられるものを、次の1～4から一つ選べ。

- 1 他人をときめかせる
- 2 自分の存在を社会的に強化していく
- 3 自分の輪郭を安定させる
- 4 ファッションで自分を楽しませる

解答欄(14)にマークすること

問七 次の1～4の中で、本文の内容に合致するものを一つ選べ。

- 1 身体に切れ目を入れた傷の痛みによつて、自分の意識を明確にすることができる
- 2 ファッションのポイントは、身体と衣料の十分な接触である
- 3 他人と身体をふれあうことで不安になる
- 4 服は身体に境目を設定し、自分の存在を強化させる

解答欄(15)にマークすること

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私事であるが最近、知人や友人から小冊子が送られることが多くなった。そのほとんどが長年、書き溜めたとおぼしき散文の類だ。中にはプロ級のものもあるが、そうでないものも多い。

かつて筆者の楽しみは、車中での読書であった。最近になり、その楽しみに車中での執筆が加わった。それを可能にしたのは、言うまでもなく携帯パソコンの普及だ。それは情報収集からあらずじの設定、執筆までモノ書き作業の工程を大きく変えた。特に繰り返し行う推敲すいこうに対しては、絶大な威力を発揮する。

通勤や帰宅中だけでなく、長時間にわたる出張途上は執筆には最適。自分の世界に集中できる時間は、この時をおいて他にはない。退屈な車中が、夢中になれる場に変化する。パソコンさえあれば、どこでも書齋になる。今やそれは筆者にとって、もうひとつの至福の時といっても良いほど、大きな楽しみにふくらんできた。

筆者にとり、本は読む対象から、書く対象へと変化しつつある。筆者は、愚息との童話の時間に加えて、遂にもうひとつ至福の時を見つけ出した。

同様の変化は、以前から音楽分野では指摘されていた。音楽はかつての聴いて楽しむ対象から変わり、カラオケスタジオで歌い、口ずさみ、踊って楽しむ対象となった。これも

I

社会現象の一つだ。

筆者にとっては、まず読む楽しみを感じる本が少なくなることがきっかけだ。そのことが、読書とは別の次

元の楽しみを味わおうとするシヨウドウ^aにつながった。一時的に本と縁が切れた時もあった。

しかし元々、本好き人間のこと。文章を書き込むことを覚え、徐々にそれに慣れ始め、遂に書くことを楽しむ自分を発見した。そうすると逆に、書く文章を練り込むために、本に再挑戦する必要に迫られた。

ストーリーの上手な展開法や、表現方法のちよつとした工夫、エスプリ^{*}の利かせ方^きなど、それらのシユウジユク^bにはやはり読書が一番だ。今では書くためにこそ、本を読む。そして読み終えて、また書く。このように読むことと書くことが、交互に好循環するに至った。

本稿もそのように書いた。

この循環で、本と筆者との関係は新たな段階に変化したのだ。^①これからの時代、本と人とのかわり合いは、読書と執筆双方の楽しみ方が上手く連携することで、生み出され、育まれるのではないのだろうか。

そういう時代を「書く本の時代」と命名しよう。書く本の時代とは、書くという所作が、もうひとつの至福の時間へ直結している時代のことだ。今や、国民総ライター化しつつある。そのためのネット出版など、新しいビジネスモデルも着実に育っている。ここを手がかりにして、本と人との新世界が開けることを期待したい。

しかし、単純に書く本の時代が訪れ、大潮流に育つわけではない。書く本の時代には、読む本の時代とは大きく異なる前提がある。書く本の時代が本格的に到来するためには、^②どうしても満たさなければならない必要条件がある。

ヒンパン^cに送られてくる小冊子も、確かに筆者と同様の気持ちと背景で書かれたものに違いない。熱い思いが伝わる場合もある。その人の人柄はもちろん、人生まで感じる時もある。しかし残念ながら、たいてい駄文・駄作だ。それは書き手の立場で執筆されているからだ。

II

な例は、インターネットの中にある。フォーラムで交わされる、いわゆるチャットの文章とモラルのひどさは尋常ではない。お作法の欠如は、文章を文章ですらなくする。

自己満足のために執筆された文章は、読み手にとっては苦痛でしかない。もちろん、そのことを笑うわけにはいかない。プロのモノ書きでも、売れなければ、結果として自己満足でしかないからだ。

書く本の時代に変化するための課題は、テーマの選定と絞込み、自己満足でない執筆法の習得、あるいはそのようなスタンスのPRなどだ。その課題への対応を、最後の締めくくりとして訴えたい。



書くことに興味を引かれている人、あるいは書くことが本能的に好きな人は少なくない。

特に高齢社会になり元気なりタイア層などが増加。それに伴い、その世代が時間消費型・社会参加型のモノ書き活動に誘惑されたとしても、不思議ではない。自分史や自費出版ブームは、このようにして生み出された潮流だ。

彼らのことを、マチのライターと呼ぼう。マチのライターは文字を書くのではない。思いの丈たけを書いている

のだ。

しかし、マチのライターがいくらがんばっても、すぐさま人を魅せる文章を書き始めることは難しい。そこに有能な編集者が登場する必然性がある。

名著は、

な書き手と

な編集者の協業によって生み出される。この事情は書き手がマチの

ライターでも、プロのライターでも同様だ。特に、筆の勢いと思い込みだけで執筆しがちなマチのライターにとつては、優秀な編集者との出会いが欠かせない。

読む本の時代には、マチの本屋さんが指南役だったことは前述した。書く本の時代には、マチの編集者がその指南役を担うことが重要だ。その意味でマチのライターには、マチの編集者が対応して然るべきだ。

ところで中小の出版企業には、優秀な編集者やプロダクションを抱えているところが多い。しかし厳しい業界の現状の下、不幸にして機会に恵まれず、能力をもてあましている人も少なくない。また大手出版企業は、マチのライターにはつかず離れずという

だ。実態は離れずというより、つかずの方かも知れない。

出版業が出版業として最後まで機能するとすれば、それは編集機能を置いて他にはない。また同様の意味で、編集者の存在意義とは、編集・企画に関するプロデューサーとしての高いケンシキ^dに尽きる。目利き^{めき}がきく編集者を、閑職にくさらせていて良いはずはない。また、編集者が自信を回復することは、出版の活性化につながる。

書く本の時代において彼らを活用するため、マチのライターと組み、マチの編集者としていちづける。そのこ

とで、本と人との新たな接点づくりを図る。そうして読む本の時代から、書く本の時代への脱皮を促進する。その結果、本を書くことと本を読むことを総合的に活性化し、新しい本好きを育てる。

このようなことが実現すれば、出版の社会で立派に誇れるはずだ。その時に、この動きのことをニッチとは決して呼ばせない！

書く本の時代へ向けて、早期に IV を成し遂げた者。本と人の新しい関係を早期に実現した者。その者だけが、大きな果実を手中にできる。

読者のために何を書き、執筆のために何を読むのかという原点に立ち返り、本と人のあり方を語り合うことから始めよう。

その努力を避けて、本の明るい未来はない。

(志川久「もう一つの至福の時間へ」より)

(注) *エスプリ…フランス語。ここでは才気、機知の意。批評精神に富んだ軽妙な言葉を当意即妙に述べる才能をいう。

問一 二重傍線部 a～d のカタカナの漢字表記として最も適当なものを次の各群の 1～4 からそれぞれ一つ選べ。

a	1	償動	2	衡動	3	章動	4	衝動
b	1	集熟	2	修熟	3	習熟	4	衆熟
c	1	頻般	2	頻繁	3	頻汎	4	頻範
d	1	見識	2	驗識	3	賢識	4	堅識

a は解答欄 (16) にマークすること

b は解答欄 (17) にマークすること

c は解答欄 (18) にマークすること

d は解答欄 (19) にマークすること

問二 Ⅰに入る語句として最も適当なものを次の各群の 1～4 からそれぞれ一つ選べ。

Ⅰ	1	消費型	2	享楽型	3	参加型	4	開放型
Ⅱ	1	一般的	2	典型的	3	古典的	4	先端的
Ⅲ	1	ニュアンス	2	スタンス	3	バランス	4	ディフェンス

IV

1 戦略化

2 情報化

3 個性化

4 開放化

I は解答欄 (20) にマークすること

II は解答欄 (21) にマークすること

III は解答欄 (22) にマークすること

IV は解答欄 (23) にマークすること

問三 傍線部①はどのようなことを言おうとしているのか。最も適当なものを次の1～4から一つ選べ。

- 1 読んで楽しむ段階から、ストーリーの展開法や表現方法を学ぶために本を読む段階へと変化した。
- 2 本を読むだけの読者の段階から、本を読んで本を書くという読者と作者とを兼ねる段階へと変化した。
- 3 本を読む楽しみが少なくなってきたので、本を読む段階を過ぎて自分で本を書く段階へと変化した。
- 4 読書とは縁が切れて別の楽しみを味わおうとした段階から、再び読書を楽しむ段階へと変化した。

解答欄 (24) にマークすること

問四 傍線部②の「必要条件」とはどのようなことか。最も適当なものを次の1～4から一つ選べ。

- 1 作者の熱い思いや人生を読み手に感じさせるような文章であること。
- 2 書き手のための文章ではなく、モノ書きとして売れるための文章を書くこと。
- 3 インターネットのチャットのような、レベルやモラルの低い文章を書かないこと。
- 4 自己満足ではなく、テーマや執筆方法が読者に受け入れられるものであること。

解答欄(25)にマークすること

問五 傍線部③の具体例として適当でないものを、次の1～4から一つ選べ。

- 1 あとさきを考えず感情にまかせて書かれたSNSの文章。
- 2 自分の経歴や仕事の実績を自慢するために書かれた自分史。
- 3 先行文献を踏まえて学術的な態度で執筆された自費出版。
- 4 読者の理解や共感があまり得られない私小説。

解答欄(26)にマークすること

問六 傍線部④の と に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の1～4から一つ

選べ。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|----|
| 1 | ア | 臆病 | イ | 強気 |
| 2 | ア | 無邪気 | イ | 狡猾 |
| 3 | ア | 大胆 | イ | 繊細 |
| 4 | ア | 不健康 | イ | 健全 |

解答欄(27)にマークすること

問七 文中の破線部の行動はどのような人を行動の主体として想定しているのか。最も適当なものを次の1～4

から一つ選べ。

- 1 大手出版社の編集者。
- 2 この文章の筆者自身。
- 3 出版業に携わる人々。
- 4 これからの読者たち。

解答欄(28)にマークすること

問八 次の1～4の中で本文の内容に合致しないものを一つ選べ。

- 1 自己満足だけで終わる執筆でも、「書く本の時代」が到来するためにはそれを認めるべきである。
- 2 本文の筆者が本の読者から本の書き手へと脱皮できたのは、携帯パソコンの普及と無関係ではない。
- 3 ライターの著作を単なる自己満足のための執筆にしないためには、ちゃんとした編集者が必要である。
- 4 自分史や自費出版のブームは、「書く本の時代」の到来のためには一つの良いきっかけと言える。

解答欄(29)にマークすること

以上で問題は終わりです。

総合型公募制学力入試 解答

国語 総合型公募制学力入試Ⅱ期

大問	解答番号	解答	大問	解答番号	解答
一	1	3	二	16	4
	2	3		17	3
	3	2		18	2
	4	1		19	1
	5	4		20	3
	6	1		21	2
	7	2		22	2
	8	2		23	1
	9	4		24	2
	10	3		25	4
	11	3		26	3
	12	3		27	3
	13	4		28	3
	14	4		29	1
	15	4			